



(上)博物館の展示の維持管理について指導する
永金宏文・JICA専門家
(中)「シーギリヤのわな」をテーマにした展示。シー
ギリヤ地方に伝わる、焼き畑を動物による被害から
守るために仕掛けられる「わな」を再現した
(下)博物館のロビーに、自分たちが描いた絵が飾ら
れているのをうれしそうに眺める子どもたち

「来て、見て、楽しい」施設を目指し、

後半、巨大な岩の頂上に築き上げられた王宮の遺跡。古代の画家によって描かれた壁画なども残っており、その神秘的な魅力は、訪れた者のみを感じることもできる特権だ。

しかし、これまでは岩山に登るだけ。シーギリヤロックの背景にある歴史などを伝える場所も人も存在しなかった。そこで昨年7月、日本の協力で完成したのが「シーギリヤ博物館」。周辺のアクセス道路やトイレなども、円借款で整備が進められている。さらに現在、博物館の運営能力向上を目指して「シーギリヤにおける地域主導型観光振興プロジェクト」も進行中だ。

「観光協会は、まちづくりの環境でもある」と土井さんは強調する。「ですから、その担い手となるのは、地域の住民自身なんです」。そこでプロジェクトが立ち上げたのが「ダンブッラ・シーギリヤ観光振興協会（ADSTP）」。

「観光協会は、まちづくりの環境でもある」と土井さんは強調する。「ですから、その担い手となるのは、地域の住民自身なんです」。そこでプロジェクトが立ち上げたのが「ダンブッラ・シーギリヤ観光振興協会（ADSTP）」。



自然と一体化した造りになっているシーギリヤ博物館。館内にはスロープも設置され、障がい者の訪問にも考慮されている(撮影:久野真一)

2つの奇跡
世界遺産の恵みを生かして

日本から飛行機で約9時間、インド洋に「光輝く島」と呼ばれる国がある。

「スリランカ」―紅茶の生産地として、耳にしたことがある人も多いかもしれない。近隣にあるのは、バックパッカーの聖地として名高いインドや、世界的なリゾート地として知られるモルディブ。しかし、これらの国に行ったことがあっても、スリランカを旅したことがある人は、果たしてどのくらいいるだろうか。

2009年5月まで続いた民

族紛争の影響もあり、観光を楽しむには治安への不安が付きまとい、ていたこの国。しかし、北海道の面積にも満たない国土は、美しい海と緑に囲まれている。この魅力に恵まれて、7つもの世界遺産に恵まれている。この魅力を世界に伝え、国の発展の糧としたい。紛争が終結した今、政府は「観光」を国家政策の一つに掲げ、各地域でその可能性を探ってきた。

特に注目されているのが、島の中心部にあるダンブッラ地区。2つの世界遺産を有し、自然

豊かな湖や仏教遺跡、マーケットなど、実に個性豊かな要素が散りばめられている。JICAもこれらを観光資源として生かし、まちづくりを進めるべく、地域の人たちと共に、観光振興の取り組みを進めている。

中でも、ジャングルの中にそびえ立つ巨大な岩山「シーギリヤロック」は、観光の目玉として大きく期待されている。5世紀

シーギリヤの魅力を 国の復興の力に

四半世紀にわたる内戦が終結し、今、復興の真ただちにあるスリランカ。そのツールの一つに考えられているのが、地域の資源を生かした「観光」だ。島の中心部、2つの世界遺産を有するダンブッラ地区では、JICAの支援により観光振興が進められている。



大自然の中に雄大にそびえ立つシーギリヤロック。スリランカの人々の誇りだ(撮影:久野真一)

「白川郷案内の会」の上手重一さんから、白川郷の歴史、保存運動、景観保存のための住民の活動などについて説明を受けるスリランカの研修員たち

